

女の庭 佐藤愛子



女の座

佐藤愛子

光風社出版

渡辺喜恵子 ㊦800

馬淵川

みちのくの女たちの四代七十年にわたる死と愛の歴史。彫琢十年の名作。 第四十一回直木賞受賞作。

和田芳恵 ㊦900

塵の中

女のいのちの修羅、愛と憎しみの姿態のむごさを重い凝視に捉える。 第五十回直木賞受賞作。

永井路子 ㊦880

炎環

鎌倉の若い権力の座の周辺に生き、愛し、闘う武將と女人たち。 第五十二回直木賞受賞作。

作品集

女の庭

目次

女の庭

五

猫

九

終りの時

一五

ソクラテスの妻

一七三

女 の 庭

一章

六歳のとき、松山久子は初恋をした。

林長二郎という名の映画俳優だった。

映画館の映写幕に、若侍の顔がいっぱいにひろがっていた。彼の目は裂けんばかりに見開かれたまま、久子の顔をじっと見つめていた。鬚ひげのはつれ毛が、その目にかかっていた。彼は幾人もの男に取り押えられているのだった。彼の形のよい唇は慄おそえていた。大きな目に涙が滲にじみ出た。彼は久子に向って訴えるように大きく口を開き、それから後向きになつてあらくれ男たちに連れ去られて行った。

久子は女中に向つていった。

「あの侍、何ちゆうひと？」

「浅野内匠頭あさのうちょうずですがな」

女中は答えた。

「けど、長さんてよろしなあ……」

「長さん？ 長さんて誰？」

「あの侍さんになった人ですがな。林長二郎……」

その名は久子の胸に灼きついた。夜、眠ろうとすると、あの目が迫って来た。

小学校三年の秋、町内の祭礼があった。久子は女中と一緒に山車を見に行つた。人垣の間を、山車の引綱を手にした稚児が進んできた。

「あれ誰？ どの子？」

久子は女中の袖を引っぱった。

「かめ屋の哲ちゃんやおまへんか。煎餅屋の……」

稚児の眉の上には、薄墨で丸い点が描いてあった。久子はそれに見とれた。稚児がゆるやかに一歩踏み出すたびに、冠の金の瓔珞が揺れた。久子は息を詰めた。美しいと思つた。

何日か経ってから、久子のかめ屋の哲夫が材木置場で高等科の生徒に虐められているのを見た。

哲夫は蒼白になって、気でも狂つたように両手をふり廻していた。高等科の生徒たちは笑いながら、彼をその輪の真中へ包み込み、押しつぶした。哲夫の小さな頭もふり廻している手も、土の中へめり込んでいくように彼らの輪の中に見えなくなり、どっと笑い声が上った。

久子はテーブルの上に哲夫を縛りつけて、手術をする空想にふけた。キラキラ光るメスを手に

して哲夫の臍へその下を切り開くと、哲夫は身もだえして叫び、下腹部の切り口は血を流しながら、笑ってでもいるように歪ゆがんだり伸びたりする。その空想は何年かつづいた。哲夫ではなく、別の男の子に変わっていることもあったし、顔も知らぬ女の子になっていることもあった。

ある日、久子は女中と一緒に銭湯へ行った。彼女の家の風呂が壊こわれたのだ。銭湯へ行くのは生れてはじめてだった。久子は珍しさにキョロキョロした。女中がそんな久子を叱なぐさめた。そのとき、久子は頓狂とんきやうな声でいった。

「佐和さわどん、見てごらん、ほら、みな、あんなところに毛が生えてる——」

女中は久子がこれまで見たこともないような怖い顔をした。

「なにいうてはりますねん。そんなこというもんやおまへん——」

「佐和さわどんいうたら、見てみいな、今入って来た人……ほれ、仰山ぎやうさんやわ、わァー仰山生えてるわ……」

久子は夢中でさわいだ。

「ほれ、ほれ、あの人見てみい、あの人のはチィとやな、やあ、けつたいやなあ、なんであんなとこに毛、生えるんやろ……?」

そのとき久子の耳許で、女中の押し殺した不気味ぶきみな声があった。

「とうさん、そんなことばっかりいうてはったら、今に氣違きちがいになりますせ」

久子は黙った。「氣違い」という言葉が熱い風となつて頭の中を廻つた。久子は女中のするまゝに、おとなしく身体を洗われた。

——氣違いになる——氣違いになる——その言葉が頭の中をグルグルまわつた。

銭湯を出て、長い一筋道を歩いた。商店街を抜け、呉服屋の角を曲り、やがて久子の家の坂塀につき当るまで、その言葉は頭の中をまわっていた。

「さ、入りなはれ。もうあんなこと、いうたらあきまへんで」

女中が格子戸を開けてそういったとき、久子は突然、長く尾を引く叫び声を上げた。足をバタバタさせ、握り拳を宙にふつて叫んだ。

「いややア、どないしょオ、氣ちがいになつたア……氣ちがいになつたア……」

松山家の主治医は駆けつけて来たが、この発作に何という病名をつけてよいのかわからなかった。主治医は「小児性神経衰弱」という病名をつけた。

二 章

1

久子の父松山勇造は、大阪でも屈指の海産物問屋だつた。十三のときに海産物屋の丁稚に入り、三十二の年に主家を出て、備後町にささやかな店を構えた。長女の邦江が生れたのは、勇造の苦闘

時代である。五年経って久子が生れたとき、丁度、商売が上り坂にさしかかったところだった。

「この子は福の神やな」

と彼はよくいった。久子が生れてから、商売は躍進的に繁昌した。松山家は三年の間隔で、より大きな家へと移転して行つた。久子が高等女学校へ入学した年、居宅を阪急沿線^{あしや}芦屋に新築した。その頃には久子の一つ下に光子、三つ下に勇一、五つ下に絹代が生れていた。新居の二階は多勢の子供のためのそれぞれの個室と、「娛樂室」と称する広大な広間で占められていた。階下は客をもてなすための洋風の部屋や、竹の間とか桐の間とかいう名をつけた幾つもの和室、食堂、居間、寢室など、母のかめ乃が思いつくままに金にあかせて拡げていった家だった。「娛樂室」というのも、かめ乃の好みで作られたものである。ある夏、一家揃って出かけた高原のホテルからヒントを得たものだった。

しかし勇造は折角建てたその家に殆どいなかった。彼は大阪の店の二階の、天井の低い一部屋で使用人たちと一緒に寝起きすることの方が多かった。それは彼の主義でもあり、また好みでもあったのだ。かめ乃は毎日、勇造の着換えや食べものを持って大阪の店へ出かけて行き、三日に一度は店に泊った。そこで子供らの世話は年とった女中に任せられ、夕飯のときには、めいめいが食べたいと思つて買つて来た惣菜^{そうさい}ものを、竹の皮包みのまま食堂のチークの大テーブルの上に並べるといふような生活となつた。

久子は高等女学校の三年だった。その一年前に初潮^{しよちょう}を見たが、母にも友人にもひた隠しに隠して

いた。彼女はその手当のしかたに耐えがたい屈辱を感じた。

級友たちは月経のことを「アレ」といつていた。学校の衛生室で売っている衛生綿は五銭だったので、「五銭」という代名詞もあった。

「アレで、どんなん？ オシッコするとき、どうなるのん？」

などと、久子はわざと訊いた。皆が笑いこけるのを見て、

「なに？ なに？ なにがおかしいのん？」

ととぼけた。

久子は乳房が日ましに膨らんで行くことを気に病んでいた。彼女は自分の胸の盛り上がりようが、誰よりも大きく、異様だと思った。胸の盛り上がりばかりでなく、腰も腿も厚くはり切って来るのが耐え難いほど醜く思われた。彼女は背が高く骨太で筋肉質だったので、胸や腰が発育すると、ひときわ目立つ大きな女に見えた。級友は久子をクロちゃんと呼んでいた。かげではクロブタといっていた。久子はクロブタといわれていることは知らなかったので、級友は自分の色の黒いことばかりに気を取られていると思い、胸や腰の異様な大きさを気づかせないでおくことが出来るのなら、もっと色が黒くなってもいいと思うのであった。

仁戸部彰子は紺サージの制服がよく似合う少女だった。厚ぼったいサージの上着はだぶだぶで、それが却って彼女の身体の、少年のように固い線の細さを際立たせるのに役立っていた。背は高く

も低くもなく、美しい手をしていた。髪を無造作に短くしていた。歩く時、左肩を心持上げて歩いた。ときどき、顔をしゃくするようにして、額に落ちてくる髪をふり上げていた。彰子の何もかもが、久子には素晴らしく思えた。その板のようにまっすぐな胸は、彼女の永遠の清潔を物語っているようだった。彰子だけは、乳房が膨らんんだり、腰に肉がついて来たりすることは永久にないだろう、勿論、彰子のような少女には、あの醜惡な月々の生理の訪れもないにきまっている、と思った。

気がついたら久子は彰子を愛していた。教室の斜め後の彼女の席から彰子の方を見ると、ま横に切れ込んだ薄い唇と、男のようにしっかり張った顎が見えた。久子は何度かその口にキスしたいと思った。彰子のそばに寄ると、日なたの枯芝のような匂いがした。その匂いは彰子という少女にびつたり匂いだと思って久子は感心した。

久子は体操の時間に頭に締める彰子の白ハチマキを盗んだ。ハチマキには彰子の匂いがしみついていて、それを嗅ぐたびに久子はやるせなさでいっぱいになった。しかし、久子が大事にスカートのポケットに入れているうちに、ハチマキから彰子の匂いは消えて行つた。それを久子は自分の醜さのように感じた。久子はそのハチマキを、彰子が代りに買ったハチマキと取り換えた。

体操の時間、彰子は不思議そうな顔もせず久子を取り換えておいた元のハチマキを締めていた。彰子のそんな無頓着さは、その陽焼けたそっけない表情と共に、久子をいっそう惹きつけた。

その年の夏、支那事變が勃発した。

校庭を見下ろすような形で、学校の後を通っている鉄道線路を、兵士を満載した貨車が毎日のよ

うに通つて行つた。東から西へ行くこともあつたし、西から東へ行くこともあつた。その貨車を見つけると校舎の窓という窓、入口という入口から生徒たちが身を乗り出して、バンザイを叫ぶのだった。そのときのために日の丸の旗を用意している者もいたし、貨車を目がけて校庭をまっしぐらに走り出す者もいた。授業時間であろうが、試験中であろうがおかまいなしだった。教師もそれを阻止しようとはしなかった。

久子は彰子が皆と同じように熱狂して窓にかけ寄るのをいやだと思つた。久子自身はそうするが、彰子だけはしてほしくなかった。彰子はどんなときでも冷やかに、そっけない表情で、一本の青竹のように立っていてほしかったのだ。

「なにがバンザイやろ？ 考えてみたらちつともバンザイやあらへん。戦争に行つて死ぬかもしれんことが、なんでバンザイやろ？」

ある日、突然、久子はそういつた。放課後の掃除のときだった。久子の声は彰子に聞かせようとして、異様に甲高かんかった。黒板を雑巾ぞうきんで拭いていた彰子が、さつとふり返るのを久子を見た。雑巾を片手に握つたまま、彰子は教壇を下りて来た。陽焼けた彰子の顔が激した感情のために赤黒く光っていた。

「非国民！」

低い声と同時に、久子の右の頬が鳴った。打たれた！ と久子は思つた。久子はよろめき、歪めた顔を彰子に向けた。みぞおちの奥から熱いものが全身にひろがって行くのを久子は感じた。久子